

老いて亡くなることが
わかっている、
受け入れられません。

いのちについて考えるきっかけになった方もあるかもしれせん。
そして今回の問い3では「老いて亡くなるのがわかっている、受け入れられません」と、私たちが抱える苦悩がテーマになっています。ここでは私自身の内面が自然と掘り下げられるようにとテーマが設定されているのだと思います。先の二つの問いを通して苦悩と向き合うことを中心に考えたいと思います。

素直にならずけない

私がお参りに行きますと、いつも玄関まで走って出迎えてく



中川 大城
(連研中央講師)

レッツ!
真宗!

連研

12の問い

15

今回は問い3です。振り返ってみますと、問い1では「私にとって幸せとは何でしょうか」と、幸せの基準や幸福観について考えました。どんな意見をお持ちだったでしょうか。「お金に困らずに生きていけたら」「仕事が成功すれば」「若々しく健康でいること」など、いろいろな考えがあるのだと思います。そして問い2では「葬儀や法事は何のためにするのですか」と、儀式について考えました。「何のために儀式を行うのですか」と問われて「あらためて聞かれると答えにくい」と感じながらも、大切な方の死を通して

れる小さな男の子がいるのです。「今日はお兄ちゃんが来てくれたんやね」と声を掛けてくれました。私が「一緒にお仏壇でおつとめしようね」というと「はい!」と返事をして後ろに座ってくれます。ご家族から私の訪問を心待ちにしていると聞かせてもらい、とてもうれしい気持ちになりました。

それから何カ月か経ったある日のこと、男の子と再会することができました。「おはよう」と声を掛けますと「今日はおっちゃんに来てくれたんやね」と言うのです。突然呼び方が変わったのです。当時20代前半でし

老いて亡くなることがわかっても、
受け入れられません。

だが、私は人生で初めて「おっちゃん」と呼ばれたのです。平静を装いましたがきつと表情に出してしまったと思います。小さな子どもから見れば、私と年齢差を感じるのは当然です。もっと寛容な気持ちで接していれば、ショックを受けたり腹立たしい思いはしないのでしょうか。なぜ腹が立つのか、それは私におっちゃんの自覚がなかったからだと思います。「そんなに年をとってない」という私の思い込みが怒りを生みます。何歳になっても「あなた老けたね」と言われて素直にはうなずけません。やはり老いを受け止める

いでしよう。お釈迦さまのご生涯においても、老病死の問題は出家にいたる動機のひとつともいわれています。お釈迦さまは苦について、老病死に加え、生まれ生きる苦を加えて四苦（生老病死の4つの苦しみ）としてお示しくださいました。苦を受けることは不幸である、できれば避けて通りたいと思いますが、必ず受けていかねばなりません。また苦を受けることが不幸

ことは難しいのだと思います。

苦を活かす道

問い3のサブテーマには親の介護や看取りについても触れられています。また家族や友人の死、そしてペットをなくす寂しさについても挙げられています。ペットは人間と比べて寿命が短いことも多く、限られた命を駆け抜けるように終えてしまうように感じます。また家族や知人は年を重ねると施設に入り、病院で亡くなっていく方が多い中、人生の先輩方の苦悩に向き合う姿が、生活の場から見えにくくなりました。それでも介護

であるならば、全ての命は不幸に終わるしかありません。お釈迦さまはそこに何をお伝えにしたのか。それは苦を示しながら、これらの事象は幸せ不幸せという価値観では一概に計れないとおっしゃったのだと思います。つまり不幸にも生きられる、しかし幸せにも生きられるということなのです。ここに四苦の教えは、生老病死をただ不幸で終わらせてはならないと味わえます。これは私の常識や価値観ではむずかしい、だからこそみ教えに問い、たずねていくことが大切になります。浄土真宗のみ教えは苦を避け

やペットとの別れを通して、そこに私自身の姿を重ねながら、命あるものは全て老いてゆき、病を受け、死んでゆかねばならないことを痛感します。

いくら物質的に豊かであっても、お金に困らなくても、健康であっても、立身出世したとしても、こういった幸せは苦悩に向き合う私を支え続けてはくれません。そして、葬儀や法事などの機会においては、大切な方の死を通して、この私も必ず命を終えていかなければならないという事実を告げられます。

死を受け入れることは私たちの人生の大きな課題といつてよ

るのではなく苦を活かす道を伝えてくださるのです。病が治るのがご利益^{りやく}ではない、病をも無駄にしない生き方が恵まれる、それがお念仏のみ教えなのだと思います。そこに苦と向き合い、乗り越えさせるはたらきがあるのではないのでしょうか。

老いて亡くなることがわかっている人生は、不幸にも生きられる、しかし幸せにも生きられます。その違いは何を依りどころとして生きるのかということ。あなたにとって、依りどころとは何ですか？ この『連研ノートE』を通して考えてみてください。